

は到底認め得られないものである。一方回鶻文譯の實義疏は、前述の通り一々俱舍の頌論に疏を附し、その中には世親の論に對する衆賢の説を掲げ、更に之を安慧が論破して居る所もあつて、まさに安慧の釋についての傳説通りの體裁を有して居り、從つて紙數の如きも甚だ多いのであるが、この漢文の實義疏といふものは、甚だ簡単なもので、こゝに述べた如く、到底俱舍論の要約なるに過ぎないものである。かゝる譯であるから、同様に俱舍論實義疏と題せられて居るに拘らず、此等の漢回兩疏の内容は、全然相合せざるものであることは言ふまでもない。

唯一つ不思議ともいふ可きことは、此の漢文の實義疏の初に記された題號、物二萬八千偈といふ偈の數及び作者の名と、直ぐその後に接した歸敬の頌とが、回鶻文譯の實義疏の卷首に見える所と全く相合致する事であつて(001)卷首の寫眞及び下に譯出する所參看)、回鶻文の基づいた漢譯本には、全く之と同一文が存して居つたものと思はれる。敦煌より出た漢文の實義疏といふものは、全く安慧の作とは認め難いのであるから、かく卷首の部分だけが兩者相合致することについては、甚だ奇異に感ずるものであるが、所詮曾て行はれた安慧の實義疏の名と、卷首の歸敬の偈とを、この俱舍論の抄の如きものに前付したに過ぎぬのであらう。

六 譯述の體裁

本書の譯述の仕方について考へて見ると、原本なる漢文の字句を、極めて忠實に譯出したものと考へられる。既に原本になつた漢譯本の湮滅に歸したと思はれる今日から、如何にしてかく論斷し得るかを疑ふ人もあるが、之については相當の論據を提供し得ると考へる。寫眞について認め得らるゝ通り、本書には所々に漢字を記し、その